＜小学校　国語＞

自分の思いや考えを伝え合うことによって，学び合い，深め合う国語科の授業

－読み取ったことを伝え合う感想交流を通して－

南風原町立北丘小学校教諭　宮　平　やすみ

内容要約

学習過程に自分の思いや考えを伝え合う「感想交流の場」を位置付けて，学び合い，深め合う国語科の授業を目指した。その中で，「読むこと」と「対話」に視点をあて，子供相互に読みを深め合うことができるように，話型モデルやトークノートの活用等の指導の工夫と援助を行った。

その結果，子供一人一人が自分の考えを伝え合い，友達の考えを聞き合い，自分の考えを見つめ直すことによって，読みをさらに広げたり，深め合うことができた。

【キーワード】　伝え合う力　対話　学び合い　感想交流　読むこと

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 11

Ⅱ　研究内容 …… 12
　1　「伝え合う力」と「対話」 …… 12
　2　「読むこと」と「対話」 …… 13
　3　読み取ったとことを伝え合い，学び合う感想交流のあり方 …… 13
　4　子供が学び合い，深め合う学習の工夫 …… 14

Ⅲ　授業実践 …… 16
　1　単元名 …… 16
　2　単元について …… 16
　3　単元の目標 …… 16
　4　指導計画と評価計画 …… 17
　5　本時の指導計画 …… 18
　6　授業仮説の検証 …… 19

Ⅳ　研究の考察 …… 20

Ⅴ　研究の成果と今後の課題 …… 20
　1　研究の成果 …… 20
　2　今後の課題 …… 20

＜小学校　国語＞

自分の思いや考えを伝え合うことによって，学び合い，深め合う国語科の授業
－読み取ったことを伝え合う感想交流を通して－

南風原町立北丘小学校教諭　　宮　平　やすみ

Ⅰ　テーマ設定の理由

「言葉は人なり」と言われる。人が人と相互に関わり合うときに，「言葉」は伝え合い，理解し合う上で重要な手段となる。めまぐるしく変化する現代社会においては，言語を媒介にしてお互いの意志や思いを正確に通じ合わせること，つまり「伝え合う力」は，重要な役割をもっていると言えるだろう。学習指導要領においても，国語科の目標を「国語を適切に表現し，正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力及び言語感覚を養い，国語に対する関心を高める」としている。この目標を実現するためにも，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域の特性を生かしながら「伝え合うこと」との関連を図り，子供主体の言語活動を展開していくことが求められている。

では，これまでの国語科の授業における，学び合うための伝え合いはどうであったかと振り返ると，よく発表する数名の子供を中心に進めていく授業になりがちで，ややもすると傍観者になってしまう子もいた。しかも，発表は教師に向けてのものが多く，教師の発問に対して子供たちが自分の思いや考えをそれぞれに発表してはいるが，お互いに学び合う双方向の話し合いには至らなかった。つまり，一人一人の思いを大切にした子供主体の相互の伝え合いによる学び合い，深め合いができるような手だてが十分になされていなかったのではないかと反省させられるのである。

一人一人が自分の思いや考えを自分の言葉で表現し，伝え合い，考えを深め合うことができたらどんなにいいだろう。そこで，学習過程に，子供が自分の思いや考えを自由に語り合う対話の場として「感想交流」を設定し，指導計画へ具体化し，実践することが，子供の表現力・理解力を高め，「生きて働く国語の力」に繋がるのではないかと考えた。

感想交流は，３領域の拠点や基盤となり，一人一人の子供の伝え合う力につながる言語活動である。本研究では，その中から「読むこと」と「感想交流」に視点をおく。「感想交流」は，読みを深くする機能を持っている。友達の読みと自分の読みとは違う。それが読みを高めていく。そこで，〈読みの段階〉ごとに読みを深めるための対話である「感想交流」を学習過程に位置付けることにより，自分の意見と友達との違いを実感し，自分の考えを見つめ直すことができるようにする。このような「読むこと」における対話活動を通して，子供が言葉に気付き，言葉を根拠にして読み深める力を高めると同時に，読みを通して伝え合う力を高めることができるような単元の構造化を図る。その中で，子供自身が自分の言葉で伝え合い，友達と学び合い，深め合っていくことのよさを実感すれば，子供相互の学び合い，深め合う国語科の授業が実現できるのではないかと考えた。

したがって本研究では，読み取ったことを伝え合う感想交流を通して，「学び合い，深め合う国語科授業の創造」を目指したいと考え，本主題を設定した。

＜研究仮説＞

自分の考えを広げたり，深めたりするために，以下のような手だてをすれば，互いに学び合い，深め合う授業が展開できるだろう。

1　読み取ったことを広げたり，考えを深めたりするために，学習過程の中に，「感想交流の場」を位置付けて自分の思いや考えを伝え合う。

2　読みを深め合う感想交流を活性化するために，子供の実態や読みの発達に沿ったトークノートや話型モデルの活用等の指導の手だてを図る。

Ⅱ　研究内容

1　「伝え合う力」と「対話」

(1) 伝え合う力を育てる「対話」

学習指導要領の目標に「伝え合う力」が示された。これは単なるコミュニケーションスキルではなく，人と人との関わりの中で，互いの立場や考えを尊重しながら，言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする双方向の力である。その「伝え合い」の内実を問うキーワードが「対話」である。一人一人の異なった意見や考えが「対話」によって，歩み寄り，お互いが納得することができる「対話力」が，今求められている「伝え合う力」である。言葉が「人と関わる力」「人と交わる力」となったとき，国語科の重要な基礎学力となり「生きて働く国語の力」となる。

(2) 国語科授業における対話モデル

子供の「言葉による伝え合う力」という観点から，これまでの国語科の授業を振り返ってみると，主に次のような反省点があげられる。

○　自分の思いや考えが，自分の言葉で十分に表現できない。
○　相手の話に心を傾けて聞き合っていない。
○　話し手と聞き手が双方向的に話し合うことが十分でない。
○　授業が子供同士の学び合い，深め合いの場になっていない。

→ 対話が成立していない → 伝え合いが成立しない

このような課題を解決する手だてとして，国語科授業において「対話」による相互交流をもっと活発にし，子供がお互いの思いや考えを深め合えるような授業を仕組むことが必要である。そのモデルを示したのが図１である。国語科授業において，次のような観点で「対話」を活性化させる。

① 他者との対話・・・学習者A ⟷ 学習者B
② 自己内対話　・・・a ⟷ b
③ ことばの本質との対話

そして，これら３つの「対話」が活性化する中で，④共感的な関係をつくり，⑤新しい意味を創造するのである。これらの５つの観点は，「伝え合い」の成立を検討する指標となる。

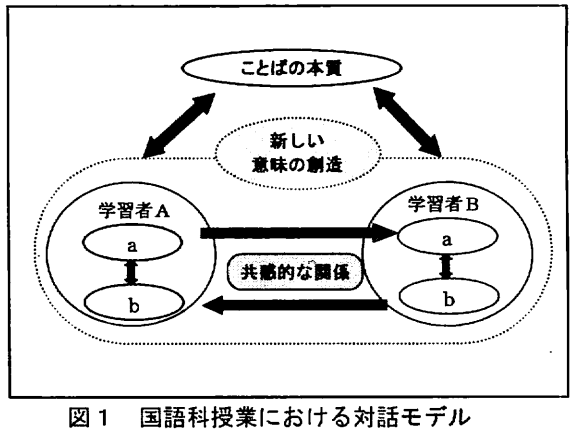


図１　国語科授業における対話モデル

(3) 対話能力の系統性

学習指導要領には，「話すこと・聞くこと」の領域の３つ目に「ウ話し合うこと」について指導事項が示されている。この内容を「対話能力」を身に付けることの拠点と捉え，以下のように「対話能力」の指導目標を系統化し，各領域において「対話」との関連を図った指導を行うことで培っていく。

「話し合うこと」の指導内容に基づく対話能力の系統性

	〈第１，２学年〉	〈第３，４学年〉	〈第５，６学年〉
〈学習指導要領内容〉	身近な事柄について，話題に沿って話し合うこと。	互いの考えの相違点や共通点を考えながら，進んで話し合うこと。	自分の立場や意図をはっきりさせながら，計画的に話し合うこと。
〈対話能力の具体目標〉	**対話を楽しむ段階（親和的）** 楽しく自由な対話経験を通して，ことばをつなげていく喜びを実感する。	**対話によって，考えが広がり，深まることによさを感じる段階（受容的）** 対話を通して，体験や考えを共有し，学び合う喜びを味わう。	**対話によって，見方・考え方が深まることによさを感じる段階（対論的）** 対論によって視野が広がり，見方・考え方が深まる満足感を味わう。

2「読むこと」と「対話」

(1) 「読むこと」における「対話」－指導事項エとの関連

「読むこと」エの指導事項は，文章から読み取った内容について，自分なりの感想や意見などをまとめること，いわゆる自己啓発的な読みを行い，自分の考えを広げたり深めたりすることで，見方や考え方を広げる読みの力をつけていくことをねらいとした事項である。そこで，次のような読みの学習が大切になってくる。

〈一人一人の読みを確立していくための基礎基本〉

① 叙述に着目した読みであること。
② 自分の思いや考えをはっきり自覚すること。
③ 読みの交流から自分の意見と他者の意見の違いを実感すること。
④ 正確に読み取る力を生かして読み広げ，新たな発見・創造へと発展すること。

本研究では，各領域と対話の関わりの中から，「読むこと」と「対話」について研究を焦点化する。対話は読み取ったことを深める機能を持っている。自分の読みと友達の読みには違いがある。だから対話が必要であり，対話による相互理解が重要なのである。そのことが，「読み取った内容について，自分の考え方をまとめ，一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」になり，新たな読みの意欲にもつながっていく。つまり，本研究では，上記の①②に基づいて，③を行い④へと発展させていくという流れにおいて，特に③に視点をあて，読み取ったことを対話を通して伝え合うことにより，自分の考えを深め合い，学び合う授業を目指すものである。

(2) 文学単元における「対話」－指導事項ウとの関連

４年生の文学教材においては「ウ場面の移り変わりや情景を，叙述を基に想像しながら読むこと」が中心となる。物語文においては，特に登場人物の心情，場面の情景などを豊かに読み深めるのに「対話」は重要な役割を果たす。読書が「作品との対話」であるのに対して，感想交流は「他者（友達）との対話」であり，他者の読みから学び，それを取り入れ，再度自己の読み取りを見直し，深めていくという新たな読みを創造する「対話」である。そこで，子供が主体的な読み手として言語活動を展開し，相互交流的な対話を通して読みの力を向上させていくような学びの場を設定する。すなわち，図２のように，学習過程の中に，読みの段階に沿った対話を位置付け，螺旋的に反復し繰り返しながら，子供自身が〈読み〉の深まりを自覚できるような単元の構造化を図る。

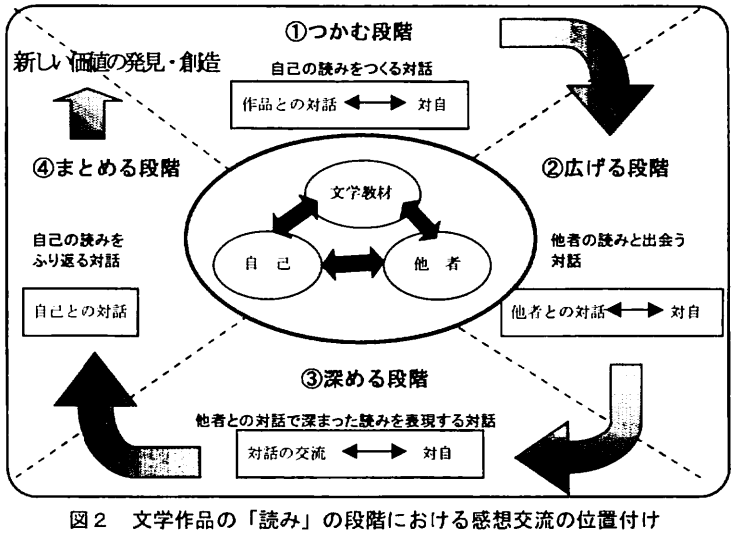


図２　文学作品の「読み」の段階における感想交流の位置付け

3　読み取ったことを伝え合い，学び合う感想交流学習のあり方

(1) 感想交流の目指すもの

感想交流とは「言葉を通して心を交わし，お互いのよさを認め合い，新しい価値が発見・創造される対話」であるとする。学習過程において，読みの段階に沿って次のような「対話」を位置付けることによって学習が深められていく。

① 自分の考えをもつ「作品（教材）との対話」
② 友だちの意見と比べ，広げる「ペアとの対話」
③ 自分の考えを深める「みんなとの対話」

⇄

④自分の考えを見つめる「自分との対話」

「作品・友達との対話」は絶えず，「自分との対話」に返されながら，繰り返されていく。このような言語活動を通して，次のようなことが期待できる。

◇　学習過程の中に読みの段階に沿った「対話」の時間と場面を位置付けることによって，作品に対する自分の考えをもち，友達の意見と比較し，自分の考えを深めていく。
◇　友達との「対話」により，互いの読みにゆさぶりをかけ，新しい価値が発見・創造される。
◇　共感して聞くことにより，お互いの話の内容や話し方のよさを認め，学ぶことができる。

(2) 感想交流を中核に据えた授業

①　感想交流を中核に据えた基本的な学習過程

子供の実態や単元指導計画に応じて①「つかむ」②「広げる」③「深める」④「まとめる」思考操作の各段階に「感想交流の場」を設定する（図３参照）。対話の学習形態は「個人」「小集団」「全体」による形態が考えられるが，子供たちの思いや願い，目的や必要に応じて組み合わせを考えることが大切である。今回は，感想交流の経験が浅い子供の実態を考慮して１対１のペアトークと全体トークを基本として学習を展開する。

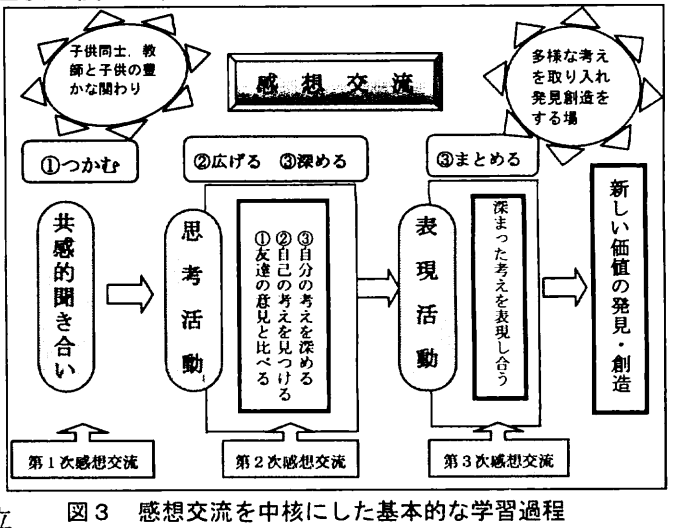


図３　感想交流を中核にした基本的な学習過程

②　基調提案－検討方式

子供同士が共有するめあてを持って対話活動を活性化するためには感想交流をどのように組織すればよいか。その話し合い活動として「基調提案－検討方式」がある。まず，基調提案者が自分なりの考えを発表する。次にその内容をめぐって友達と対話する。そして，提案者はもとより，対話に参加した学習者も全て，他者の意見をふまえて自分の考えをよりよい考えに深め，変えていくのである。

この際，感想交流を活性化させる視点として，子供の異なる知識や考えをある論点で際立たせるという「対話」の異質性が重要になってくる。そのため教師は，提案者の話題を事前に把握し，どの内容をどの順序で取り上げれば，対話をより活性化しながら読みを深め合うことができそうか，ある程度の授業の構成（デザイン）をしておく必要がある。

③　感想交流で味わう質的に高まる喜び

感想交流は，一つしかない答えを求めるための対話活動ではない。人には様々な意見があり，考え方があって自分一人では思いつかなかった考えが感想交流という他者との対話によって新しい価値が生みだされるという質的な喜びを実感させることが大切である。

④　感想交流をささえる人間関係づくり

感想交流の成立には「話し合い，聞き合い，学び合う」という心の交流ができる人間関係が大切である。「伝える」だけではなく「伝え合う」という話し手と聞き手の相互交流がなければ，よりよい人間関係は築けない。心から耳を傾けてくれる学級であれば，心からの発言もしやすい。これは，国語科に限らず，学級経営全般に関わるよりよい人間関係作りが基盤となる。

(3) 文学教材における感想交流

文学教材は，時代を超えて子供たちに訴えかけ，言葉の不思議さや美しさを伝えるだけでなく，心を揺さぶり感動を与える。低学年において同化的だった読みが，中学年では主観的な読みの楽しさを生かしつつも，虚構世界を客観的な読みとして確かめ，新たな作品世界を築こうとする読みへ高まっていく時期である。この時期に，物語の世界を共通体験しながら，友達とお互いに感じたこと，考えたことを感想交流することによって，自分の見方を広げたり考えを深めたりすることは，読みの力だけでなく伝え合う表現力を高めることにもつながる。子供同士が文学教材について語り合い，読み取った内容を自分のものとして相手に伝え合う言語活動を大事にしたい。

4　子供が学び合い，深め合う学習の工夫（読みを深める感想交流の手だて）

自分の読み取ったことを思い思いに語り合い，お互いの読みや考えを深め合っていくような子供主体

の授業が理想である。「感想交流」はその手だてのひとつであるが，それだけで子供が主体的に読み深めていけるわけではない。「感想交流」をより深め合い，学び合いの場にするためには，学習過程において，子供の実態や読みの発達に沿った指導の手だてが必要である。

(1) 読みの課題をもつ・・・「なぜ？」を付箋紙へ

子供が自ら持った問い「なぜ？」を対話を通して共通課題に組織化する。自分たちの思いが大切にされているからこそ作品を繰り返し読み，友達と対話することの必然性が生まれてくる。

(2) 叙述に基づいて読み取る・・・書きこみノートによる一人学び

自分の想像だけでなく，叙述に基づいて人物の心情や場面の情景を読み取り，語句や文章表現を大切にした感想交流にしたい。そのためにも，自分の思いや考えの基になる叙述に注目できるような書きこみノート作りをする。本文の下に記述欄を作ったり，余白を大きく取って吹き出しやイラスト，コメントをたっぷりと自由に書き込めるようにする。

(3) 物語の筋や人物像を捉える・・・読書のアニマシオン活動

作品の読みとアニマシオンゲームを関連させ，国語の力としての読む力をゲームによってより確かなものにする。アニマシオン活動を学習の前半に位置付けることで，物語への関心を高め，より詳しく読もうとする意欲を喚起する。

(4) 自分の思いや考えをはっきりと自覚する・・・トークノートへ書く活動

相手と対話をするときに，まず自分の考えを持たなければ対話は成立しない。その考えは書くことによって，よりはっきりと自分の思いを自覚することができる。そこで対話をする前に，ワークシートの上段に自分の考えを書き，対話をした後の修正・変容した考えを下段に書き直していく。それによって，自分の思いや考えをはっきりと自覚し，感想交流のよさも実感することができる。

(5) 一人一人の思いや考えを表現する・・・場の設定と話型モデルの提示

① ペアトークから全体トークへ

1対1で，進んで聞き，進んで話し合い，対話を楽しむことができて初めて，グループや全体の話し合いにおいても，必要に応じて話すこと，積極的に聞くことができる。1対1では，どの子にも話す機会が与えられる。そこで，友達との対話を繰り返し経験することによって，対話に慣れ，自信をつけ，さらには全体トークへとステップアップしていく。

② 対話の話型モデルの活用

いくら対話の機会があっても，話し合う方法がわからないのでは対話はうまくいかない。そこで，共感的な話し合いができるように資料1のような「対話の話型モデル」を提示し，対話方法を順次指導しながら，伝え合いの技能も高めていく。

資料1　対話モデル（ヒントカード）

(6) 自分や友達の考えのよさを認め合う・・・評価

感想交流をした後は，主に次のような観点で学習を振り返り，感想交流で伝え合うことによって自分や友達の考えが広がり，深まったことを実感する。さらに，教師も一人一人の変容やよさについてコメントを入れていくことで，より子供の意欲を高めることができる。

① 進んで感想を交流できたか。（関心・意欲・態度）
② 感想交流をすることで，自分の読みは深まったか。（理解）
③ 誰のどんな感想が自分の感想を深めるのに役に立ったか。（内容）
④ みんなによくわかるように話していたのは，誰のどんな発言か。（表現）

Ⅲ　授業実践

1　単元名　　人物の気持ちの変化を考えよう
「ごんぎつね」

2　単元について

(1) 教材観　(省略)

(2) 児童観　(省略)

(3) 指導観

この単元の内容は，学習指導要領「C読むこと」の「ウ場面の移り変わりや情景を，叙述を基に想像しながら読むこと」，「エ読み取った内容について自分の考えをまとめ，一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」の内容を身に付けることがねらいである。また，ここでは，読むことの能力を育てるとともに，「A話すこと・聞くこと」の「ウ互いの相違点や共通点を考えながら進んで話し合うことができること」との関連も図りながら，一人一人の思いや考えを伝え合うことを通して，学び合い，読みを深めるような授業を目指したい。

したがって，本単元の指導に当たっては，「読み取ったことを感想交流すること」を中核にして学習を進め，物語の価値的な内容を読み取るために「語句を手がかりにして理解する力」さらに「自分の思いや考えを伝え合い，学び合う力」を相乗的に育てることを目指し次のような手だてを図る。

ね　ら　い	手　だ　て
友達との感想の重なりやずれに気づき，読みの課題を明確にする。	初発の感想をピンクの付箋紙，疑問を黄色の付箋紙に思い思いに書いて，友達と比べる。
子供が主体的に読み深める。	アニマシオン活動を通して，物語の筋や人物像を読み取る。（音読・書きこみノートのすすめ）
一人学びを促し，読みを深め，感想交流の支えにする。	書きこみノートを作成し，読み取ったことや語句の理解，つぶやき等をどんどん書き込む。
友達の考えを聞き合い，一人一人の感じ方のちがいに気づき，自分の考えを見直す。	学習過程の中に位置付けられた「対話の場」で，感想を交流する。
一人一人に発表する機会を与え，発表に慣れる。	ペアトークをしてから，みんなと対話をする。
心情・情景描写や重要語句の叙述に基づいて読み取る。	自分の考えの根拠となる語句や描写をあげながら話す。
一人一人が感想を交流する技能を身に付ける。	共感的な対話の話型モデルを活用して，話し合う。
気持ちを伝えようとする意欲を高めるとともに，録音を聞いて自分の考えや表現を見直す。（評価）	ごんや兵十に贈る声のプレゼントとして，テープレコーダーに録音する。
感想交流の前後の変容を実感する。（評価）	感想交流を通して，広がったり深まったりした考えがわかるようなトークノートを活用する。

兵十との心の交流を求めて変容していく主人公ごんのせつない気持ちや悲しい心のくい違いを読み取ることが学習の中心となるが，感想交流を通して，ごんや兵十に対するお互いの思いや考えを伝え合い，学び合い，物語「ごんぎつね」を読み深める楽しさを味わわせたい。

3　単元の目標

○　友達との読みの交流を通して，感じ方の違いがあることに気づき，自分の読みを見つめ直そうとしている。【関心・意欲・態度】

○　お互いの心が通じ合えないもどかしさや悲しさを読み取ることによって，心のふれあいの大切さを知り，自分の生き方について考えを深める。【読むこと】

○　ごんと兵十の気持ちの変化を叙述に基づいて，想像豊かに読むことができる。　【読むこと】

○　互いの考えの相違点や共通点を考えながら，自分の思いや考えを伝え合い，学び合うことができる。【話すこと・聞くこと】

○　言葉のはたらきや情景・心情・行動などの描写の巧みさについて理解することができる。【言語についての知識・理解・技能】

4　指導計画と評価計画　（全 14 時間）

段階	時	ねらい	主な学習活動・内容	教師の支援	★評価規準：B基準 （　）評価方法 手だて※A児童へ ＊C児童へ
つかむ	1	物語の背景に興味をもち，全文を読んで，初発の感想を持つ。	○物語の背景を知る。 ○教師の範読 ○初発の感想を書く。 ・ごんと兵十に聞きたいこと，なぜ？ ・読んだ後の気持ち，等 ・グループで寄せ書きをする。	○興味・関心を高める資料の提示(ごんぎつね,南吉の古里) ○自分の素朴な読みを表現できるように，感想はピンク，なぜ？は黄色の用紙に１枚１項目ずつ書かせる。 ○感想メモを場面ごとに整理させる。	評価【関・意・態】 ★全文を読んでごんや兵十に聞きたいことや感想を持つことができる。（感想メモ）
もつ	2	感想をもとに，学習計画の見通しをもつ。	○初発の感想をもとに，友達と対話をして読みのめあてをもつ。 ごんと兵十に言葉のプレゼントをしよう！ ⇩ ごんと兵十についてもっと知りたいことは？ 【第１次感想交流】 ・友達との対話（感想一覧表） ・自分との対話（見直し） ・みんなとの対話	○感想メモを場面ごとに整理して提示。みんなの感想や疑問の重なりや読みのずれに気づかせる。 ○対話の話型を活用させながら，楽しく，共感的な対話ができるようにする。 ○ごんと兵十に贈りたい言葉を録音してプレゼントするためには，２人の行動や気持ちの変化をよくわかってあげることが大切なことをおさえる。	評価【話・聞】 ★自分の考えをもとに，友達と対話をしている。（観察，録音） ※友達の考えと自分の考えを比べ，相違点や共通点を見つけて，対話をさせる。 ＊話型を使ったモデルを示しながら対話をさせる。
広げる・深める	5・6・7	ごんの兵十に対する気持ちの変化を読み取る。 ・一人読み ↓ ・感想交流	○叙述をもとに，ごんの気持ちの変化を読み取る。 ごんは，どんなきつねか。なぜいたずらばかりするのか。 ⇩ ごんの気持ちが変わったのはいつ？なぜ？どのように？ ⇩ ごんの兵十に対する気持ちはどのように変わっていったのだろう。 【第２次感想交流】 ・友達との対話 ・みんなとの対話 ・自分との対話（読み深め）	○ごんの行動や情景，会話などの叙述に注目させ，ごんの気持ちや様子を読み取らせる。 ○対話の話型を活用して，話し合わせる。 ○対話を通して自分の考えの変容が見えるトークノートを作成する。 ○対話の内容のよさと対話の仕方のよさを取り上げて，紹介していく。	評価【読】【話・聞】 ★ごんの兵十に対する気持ちの変化がわかる。（トークノート・対話の観察・録音） ※みんなとの対話の場で，自分の考えをわかりやすく伝わるように具体的に根拠を示して話すようにする。 ＊２人の対話の場で，話型を使って自分の考えが話せるように助言する。
まとめる	10・11本時・12・13	ごんと兵十に贈ってあげたい言葉をまとめる。	○学習のまとめをする。 【第３次感想交流】 （ごんへ贈る子 兵十へ贈る子） ・各２名ずつ代表で「贈る言葉」を発表する。（基調提案） ・発表に対して感想交流をする。（検討） ○自分の「贈る言葉」を見直す。 ○各グループごとに録音する。 ○自己評価・相互評価	○学習したことをもとに，「贈る言葉」を手紙形式で書かせる。 ○代表を選ぶ視点 ・みんなを代表する感想 ・違う視点からの感想 ○感想交流の後で，どう変容したかわかるトークノートを作成する。 ○相手に気持ちが伝わるように手紙を読ませる。	評価【読む】【話・聞】 ★感想交流を通して，「贈る言葉」を深め合うことができる。（手紙，観察，） ※みんなとの対話の場で，自分の考えをわかりやすく伝わるように具体的に根拠を示して話すようにする。 ＊２人の対話の場で，話型を使って自分の考えが話せるように助言する。
	14	学習を終えて	○学習を終えての感想を書く。 ・読みの内容の深まり ・感想交流について，等	○学習前と後の読みの変容や深まり，さらに感想交流について，自分のよさに目を向けさせる。	評価【関・意・態】 ★自分の学習をふり返ることができる。（感想）

5　本時の指導計画　(11/14)

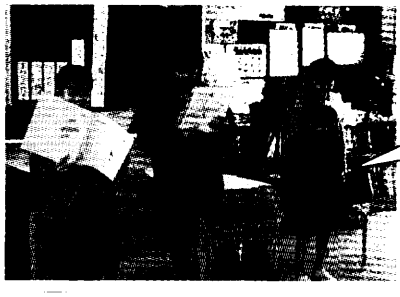
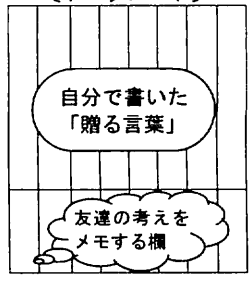
(1) 本時の指導目標

友達との感想交流を通して，ごんや兵十への「贈る言葉」を深め合うことができる。【読むこと】

(2) 授業の仮説

「ごんへ贈る言葉」「兵十へ贈る言葉」を友達と伝え合う感想交流の場を設定することによって，ごんや兵十の気持ちの読み取りが深まり，自分の「贈る言葉」をより広げたり深めたりすることができるだろう。

(3) 本時の展開の実際

	学習活動・内容	教師の支援・留意点	★　評価規準：B基準 （　）評価方法 手だて　※A児童へ　＊C児童へ
つかむ	○今日の学習のめあての確認 ★ごんや兵十に「贈る言葉」をプレゼントしよう。	・前時までに，自分の思いや考えが伝わるように，手紙形式に書かせておく。	評価の観点【読むこと】 ★ごんや兵十への「贈る言葉」を深め合うために，友達と感想を交流することができる。 （対話の場の観察，発言，ワークシートのメモ欄）
もつ	○感想交流のための「贈る言葉」を発表する。 ・発表者（各３名） （１）　ごんへ贈る言葉（3名） （２）　兵十へ贈る言葉（3名）  〔感想交流の提案をする発表者〕	・発表者を選ぶ視点 大方の内容を代表するもの 違う視点からのもの ・「基調提案－検討方式」私たちの発表をもとにして，みんなで感想を交流しましょう。 〈学習の流れ〉 ・「ごんへ贈る言葉」について，感想交流をし，その次に「兵十へ贈る言葉」について感想を交流する。	〔トークノート〕 
広げる	①友達との対話〔ペアトーク〕 ペアで感想を交流して自分の考えを広げる。 （対話ヒントカード） ・～は，わたしも同じ考えだよ。 ・～の部分は，いい考えだね。 ・○○さんの考えを聞いて，わたしも～と思うようになったよ。 ・～について，わたしはこう思うんだけど，○○さんはどう思う？ ・～ってどういう意味かな？ ・～は，どこを読んでそう思ったのかな？ ②みんなの対話〔全体トーク〕 みんなと感想を交流して，自分の考えをより広げる。 ○○さんの考えと似てるんだけど・・・ 〔全体トークの様子〕	・友達の考えのよさに注目させ，共感的な聞き合いができるようにする。 ・対話の話型を使って発表者の考え方や発表の工夫について感想を交流させる。 〔ペアトークの様子〕 自分の考えの基になる根拠や理由をあげながら話すよう支援する。 ・友達の考えを受けて，自分の考えとの相違点や共通点を考えながら話し合うように支援する。 ・話し合いが停滞しそうなときには，教師も全体トークに参加して支援する。	★自分の「贈る言葉」を深めるために，ペアやみんなと感想を交流している。 ＊友達との対話の場で，自分の考えが話せるように支援する。 みんなの前では，はずかしいけど，ペアなら話せるよ・・・ ※みんなとの対話の場で，叙述を基にしてわかりやすく伝わるような話し方を工夫させる。

※　本時の活動はここまで。学習過程③自分との対話（見直す）④深まった考えの交流活動は次時（第 12 時）へ続く。

6　授業仮説の検証

「ごんへ贈る言葉」「兵十へ贈る言葉」を友達と伝え合う感想交流の場を設定することによって，ごんや兵十の気持ちの読み取りが深まり，自分の「贈る言葉」をより広げたり深めたりすることができたか。

感想交流を通して，自分だけでは思いつかないような友達の考えを聞き合うことで，「兵十，ごんは兵十のことをかげからずうっと見守っていたんだよ。」「ごんは，くりを持ってきて，それであやまってたんだね。でも言葉ではあやまれなかったね。」等の叙述を根拠にした心情の読み取りが数多く出てきた。また，感想交流後の子供の読みに広がりや深まりが見られ，さらに表現力の面でも変容が見られた。

	【交流前】	【交流後】
（ごんへ贈る言葉）	ごんは，なんで兵十のおっかあがうなぎを食べたくて死んだと思ったの？うなぎのせいでおっかあが死んだんじゃないと思うよ。ごんは最後にいいことをしたと思う。だって，うなぎをとったつぐないにくりやまつたけをもっていったから。	ごん，兵十が「どん。」とうったときどんな気持ちだった？でもね，兵十はごんをうってこうかいしているんだよ。ゆるしてあげてね。私は，ごんはさびしいからいたずらをしたと思うよ。でもごんはいいことをしたと思うよ。だって兵十のうなぎをとったから，つぐないにくりやまつたけを持っていったんでしょ。加助に「神様のしわざ」と言われてもまだつぐないを続けたよね。すごいよ。 最後にごん，くりを固めて置いたとき，兵十に手紙を置いておけばよかったんじゃない？
（兵十へ贈る言葉）	兵十，なんですぐにごんをうったの？多分，いつもごんはいたずらをしていたから，またいたずらをしに来たと思ったんだよね。	兵十，ごんはうなぎをぬすんだ後，はんせいしてくりやまつたけを持っていったんだよ。だけど兵十も，ごんはいつもいたずらをしているから，またいたずらをしに来たと思ったんだよね。まさかいたずら好きのごんがくりやまつたけなんかを持ってくるなんてそうぞうもしないよね。 だけど兵十，これからはいくらいたずら好きな人がいても，まずその人の気持ちを聞いてから，考えた方がいいよ。

子供の読みの変容（トークノートより）

Ⅳ　研究の考察

学習過程の中に，読み取ったことを広げたり，考えを深めたりする場として，「感想交流の場」を位置付けて伝え合うことにより，お互いに学び合い，深め合うことができたか。

○　「感想交流」は，読み取ったことを広げたり，考えを深めたりする場になっていたか。

読み取ったことを広げ，深める場として，子供が感想交流のよさを実感していたかどうかについて，学習後のアンケートは次のような結果である。

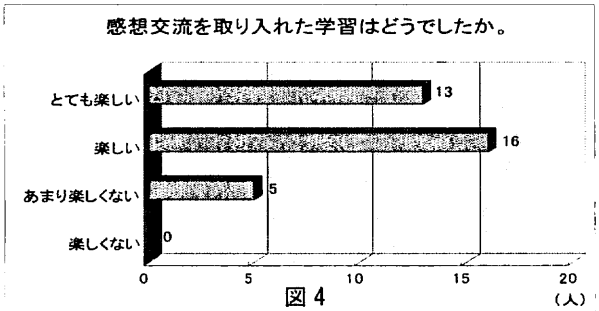


図４

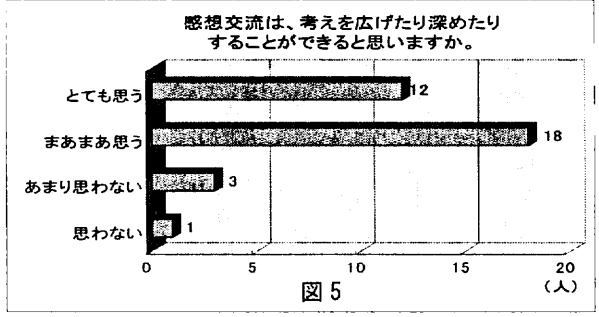


図５

図４より 85.3%の子供たちが，感想交流を中核にした学習を「楽しい」と感じている。また図５より 88.2%の子供たちが「感想交流が読みを広げ，深める」と感じていることから，学習過程の中に感想交流を位置付けることが子供たちにとって意欲的に読みを広げたり，深めたりする場として有効だったと考えられる。

○　子供の実態や読みの発達に沿った指導の手だてによって読みを深め合う感想交流は，活性化したか。

今回の授業では，子供相互の伝え合いを通して読みを深め合うことを目指した。始めは，対話がうまく繋がらなかったが，感想交流を活性化するために，トークノートや共感的な対話モデルを活用した対話活動を何回か繰り返すうちに，対話も繋がるようになり，子供相互の学び合い，深め合いができるようになってきた。その結果，子供の読みにも深まりが見られた。

（初発の感想）

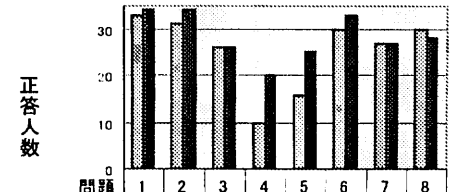
兵十は，お母さんにあげようと思ってうなぎを取ったのに，ごんが取ったから，うなぎをあげれなかったと思います。ごんはその事に気付いて，毎日くりやまつたけをおくりました。だけど，ある日ごんは兵十に殺されてしまいました。兵十はごんがいつも持ってきたことに気付きました。ぼくは，ごんがいたずらをしなければこんなことにならなかったと思います。

（学習後の感想）　下線は全体トークからの学び

新美南吉さんは，多分，いつもいたずらをしているごんが，くりやまつたけを持っていくいいきつねになったことを伝えたかったと思います。ぼくもごんがいいことをするって想像もつきませんでした。

あとひとつ言いたいことがあると思います。いたずらばかりしているきつねでも，いいことをするのだから，兵十はごんの気持ちを考えていれば，うたずに，後悔もしなかったのにと思います。

さらに，感想交流が，子供の読む力を高めるのに効果的かどうかについて，授業の前後に行った「読む力」の実態把握テストは図6のような結果である。読み取りテストの平均点は74,6点から83,5点(+8.9)に上がった。特に，正答率の低かった「問 4：助詞の係り受けの理解」「問 5：叙述から心情を読み取る」問題は，学習後にかなりの変容を見せている。これは，「語句を根拠にして自分の思いを伝えること」を意識した感想交流を通して，読みを深め合った結果だと言える。



問題	1	2	3	4	5	6	7	8
□ 授業前(人)	33	31	26	10	16	30	27	30
■ 授業後(人)	34	34	26	20	25	33	27	28

74.6点(授業前)　83.5点(授業後)　+8.9点

図6　読み取りテストの結果

○　**感想交流の波及効果**

感想交流の授業では，特にこれまで国語科の授業に消極的だった子に変容が多く見られた。例えば，

・これまであまり発言しなかった子が，感想交流を「とても楽しい」「全体トークはできなかったけどペアトークならできた」と人前で話すことへの抵抗感が和らぎ，自分の感想を持てたこと。

・文章理解が得意ではなかった子が，友達の感想を参考にしてごんへの「贈る言葉」をカードいっぱいに書けるようになったことに満足し，進んで読書をする態度へと波及したこと。

・メモを取りながら聞くことで，積極的に聞く態度や書く内容にも変容が見られたこと。

等，「感想交流」が，各領域を関連させながら相乗的に力を高める学習活動として有効であり，生きて働く国語の力をつけていくことができると実感した。また，「これまでの授業より深く考えることができた」という子供の声は，これまでの私自身の国語科授業のあり方に反省と示唆を与えてくれた。

V　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1) 学習過程に，読み取ったことを伝え合う感想交流を位置付けた単元の構想をすることによって，子供相互に学び合い，読みを深め合うことができた。

(2) 感想交流を成立させるための共感的な対話の話型モデルやトークノート等を作成し，活用することによって話し合いを活性化することができた。

(3) 語句を根拠にして読み取ったことを伝え合う感想交流を通して，子供が語句や表現に気付くようになり，対話によってより深く豊かな読みの力をつけていくことができた。

2　今後の課題

(1) 感想交流をより「読み」を深める場として活性化するための手だての工夫

(2) 年間を通して「話す・聞く」と関連させた対話能力の系統性を図った計画的・継続的な指導

＜主な参考文献＞

桂　聖　『フリートークで読みを深める文学の授業』　学事出版　2003年

多久市立南部小学校／小森茂編　『伝え合う力を高める感想交流学習』　国土社　1999年

実践国語研究　『文学単元／各学年で指導したい言語活動』　明治図書　2004年